

チグリス上流の古都 デイヤルバクル(Diyarbakır)と玄武岩台地 ～アナトリアの旅 その4～

河田 清雄 (地質 部)

デルタの形成と文化の発祥

地図を抜げてみると チグリス河もユーフラテス河もトルコ領の南東アナトリアに源を発している。

この地方は 古代ギリシア時代にはアルメニア (Armenia) と呼ばれ トロス山脈に雁行する南東トロス山脈からなる高地で 平均海拔千数百mを超える。

トルコでは チグリス河のことをディズレ河 (ディズレ ネヒール Dicle Nehir) ユーフラテス河はフラット河 (フラット ネヒール Fırat Nehir) と呼んでいる。2つの大河は東西に曲りくねりながらも ほぼ1,000 kmも南に流下して 河口付近では合流してペルシア湾に注いでいる。

古代ギリシア人が呼んだ“メソポタミア”はいまでいう北メソポタミアのことであって アナトリアの南東トロス山脈の南から バクダットの少し北あたりまでの両河地方にかざられていた。しかし 一般にメソポタミアといえば ペルシア湾までの南メソポタミアを含めた全部の地域をさしている。つまり“メソポタミア”は現在のイラク シリア トルコの三国にまたがっている。古代の南メソポタミアはバビロニアと呼ばれ さらにそ

の北部はアツカド地方 南部はシュメール地方と呼ばれる。これらに対して 北メソポタミアはだいたいのアツシリアに相当する。いわゆるメソポタミア文明とよばれているものは その骨組は南部のシュメール地方でシュメール人達によって形成されて だんだんと北上していったらしい。

この地方は 新石器時代の末頃 あるいは金石併用期への過渡期にだんだんと人が住むようになり つづいて数千年のあいだ西南アジアの文化・芸術の中心となった。

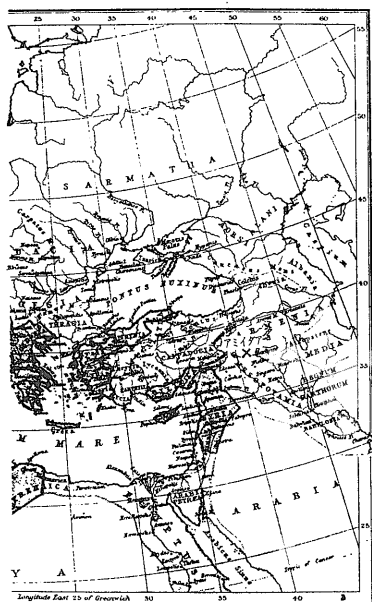
B. C. 4000~3500年頃 すでに両河のデルタが形成されはじめた頃に シュメールという民族が おそらくイラン高原地方から移住してきて この地方に安住した。

シュメール人 はこれまで知られている人類最古の高度文化の担い手であった。つまり 絵文字を柔らかい粘土の上に書いた“粘土板文書”は最初の文字形式といわれ 大きな功績とされている。つづく数百年の間にこの絵文字から“楔形文字”が発達したが これは楔のような形をしていることから このように呼ばれるようになった。 ついで彼等は“円筒印章”という奇抜なア

イディアを生み出した。すでにメソポタミアの先史時代にも印章彫刻ははじまっていたが それはスタンプ型のものにかざられていた。円筒印章では 従来のものよりもはるかに大きな図像をつなぎあわせて表現することができた。このようにシュメール人は 文化や芸術にすぐれた才能を発揮したばかりか 農耕や牧畜をもさかんにし さらに手法を改良しつつ チグリス ユーフラテス両河の上流から運ばれた肥沃な土から豊かな収穫を得ていたらしい。したがって 両河地方には



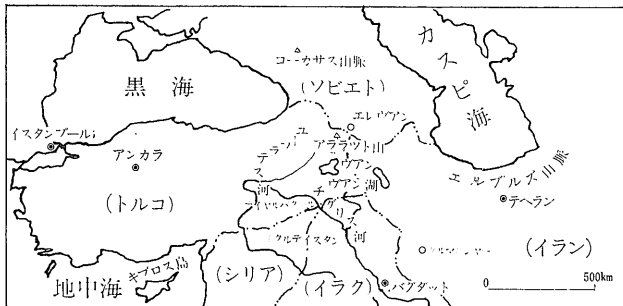
第1図A



第1図B

第1図A
古代帝国の勢力分布を示す。当時のチグリス上流地域は Mitanni (ミタンニ)の勢力下にあった

第1図B
ローマ帝国 (シーザーの死んだころ)の勢力分布図。ディアバルクルはアミダア (Amida)と呼ばれ メソポタミアの北部に入りアルメニアに接している (Everyman's Classical Atlas から)



第2図 メソポタミア上流域とトルコの近隣国

シュメール人達によって最初の“古代文明都市”が誕生した。シュメール人達は B. C. 2750年頃には 北部メソポタミアのチグリス河上流域地域までも その支配下においた。しかし B. C. 2350年頃アツカド人の指導の下にセム族がメソポタミアの支配勢力としてやってきた。彼等は数百年のあいだシュメール人の文化の下にあったが やがてシュメール人にかわりこの土地を支配し その勢力を拡大していった。これから紹介する古都ディヤルバクル (Diyarbakır) は チグリス河の西岸に臨んだ城壁のある都市で かつてはシュメール人やアツカド人達によって支配された歴史をもっている。

チグリスに育まれた古い都

トルコ南東部の そこはもうアラブ領のシリアに近くチグリス河に臨む古い都市ディヤルバクルがある。

都市は河の西岸にひらけ 広大な玄武岩台地の上にある。チグリス河の東には広く開けた沖積平野が連なっており この地方の主要な農産物の生産地として知られている。とくに この砂丘でとれる西瓜は有名で トルコ最大の大きさをほこり 1個30~40kgに達するもの

も珍しくない。毎年9月23日~30日までは西瓜まつりが開かれ その年にとれた西瓜の大きさを競い民族舞踊や仮装行列などが開かれて人気がある。

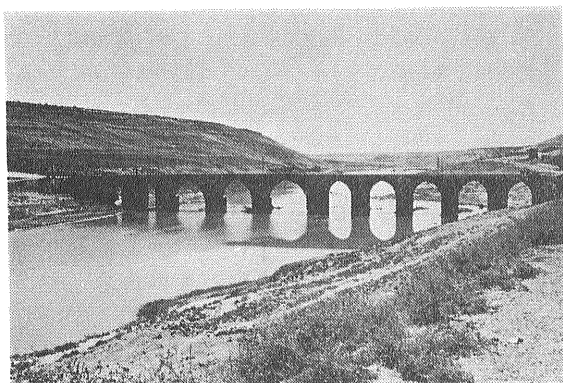
溶岩台地の地勢をうまく利用してつくられた市は 堅固な城壁によってかこまれており 数千年の昔から文化・経済の中心地として繁栄し その統治をめぐる血なまぐさい攻防をくり返してきた。

ディヤルバクルへ

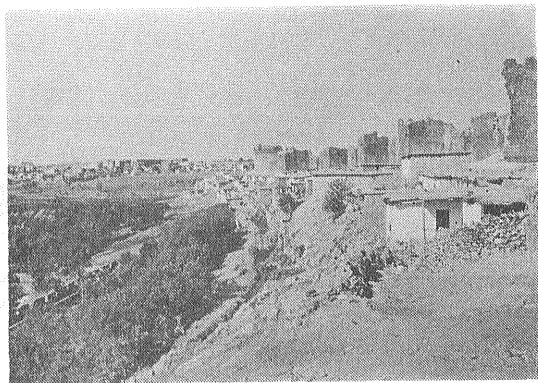
トルコを訪れる旅行者もアナトリア南東端のこの地にまで脚をのぼす人は少ないだろう。イスタンブールから約1,400km アンカラからでも950kmもあって バス旅行では2日の行程である。トルコの国内航空は小型のフォツカー28型 または D. C. 9型の双発ジェット機でアンカラ~ディヤルバクル~ヴァンの各都市を結んでおり アンカラ~ディヤルバクルは毎日1便が往復しており 所要時間は約1時間である。

ディヤルバクルには M. T. A.の南東アナトリアの支所が置かれ この地域の探査を担当している。

この地方は銅とクロームのほかに燐鉱石の産地として知られ また アラブ台地につらなる油田地帯としても最近注目されている。筆者はディヤルバクルの北方約60kmのエルガニー (Ergani) のM. T. A.のキャンプに滞在し この町の更に北にあるトルコ第一の銅鉱山として有名なエルガニーマードンの広域地質調査に従事した。週末にはキャンプの使用人達がそれぞれ 自分達の家族の住むディヤルバクルに戻るので 私も週末の休日はたいていディヤルバクルで過ごすことが多かった。この市は古いメソポタミアの歴史につながる古都であり



①チグリス河にかかる古い橋 (ディヤルバクルの南約3km) チグリスはこの地方に豊かな農産物を提供している 左側(東岸)の丘は第三紀層橋はシルバン (Silvan) 橋とよばれ6世紀の頃に この地方の住民によりつくられた



②城壁の外側から新市街の一角を望む (ディヤルバクル) 城壁は溶岩台地の上につくられた 中央部のクreek谷いに溶岩が露出している

また 周囲の玄武岩台地も雄大でアナトリアの旅には是非とりいれたいコースである。

ディヤルバクルとその史的変遷

ディヤルバクルとその周辺の地域は B. C. 3500年頃にはすでに主要な定住地として繁栄してきていたけれども 考古学の発掘では ディヤルバクル北方のエルガニーの周辺で B. C. 7000~10000年頃の遺跡がみつかっているといわれている。しかし この地方には 沢山の塚や洞穴があるが まだ考古学的な研究がなされていない。もっと発掘が進んで その資料が充分に検討されるようになれば 有史以前の人類の生活様式などが明らかにされてゆくことであろう。

この地域のほぼ中心にあたる プルフセイン (Pirhusayin) で アツカド王のマルムシン (Marmsin) に属する銘文や石碑が発見された。これらの碑文は現存するものでは トルコ最古の記録である。これによれば この地域は B. C. 2700年の頃にはアツカド王の支配下にあったことを示している。また 楔形文字の刻まれた2つの石碑が最近になって発見され それらは アツシリア王のティグラトーピレセル1世 (Tiglad-Pileser-I) とティグラトーニニップ2世 (Tiglad Ninip-II) に属することが判明した。しかし まだこの地域には未発掘の墓が多い。

ディヤルバクルが歴史的に知られるようになったのは B. C. 3500年頃からであろう。次に年表によって 激しい変遷ぶりを示してみよう。年表からもわかるように この地域は数千年の昔から支配者が激しく移りかわっていった。それは この地域が豊かな土に恵まれたメソポタミアの上流域で チグリスとユーフラテス両河川の間にあたり 経済と交通の要衝であったからである。昔から色んな種族が南から北に また西から東にアナトリアを通過してゆく。そして除々にこの地に

第1表 ディヤルバクルの歴代の統治者

年 代	統 治 者	
B. C. 3500~2750	スバル	SUBARRU
B. C. 2750~2725	シュメール-アツカド	SUMERIAN-AKAD
B. C. 2725~1260	フルリーとミイタンニ	HURRI & MITANNI
B. C. 1260~1190	アッシリア	ASSYRIA
B. C. 1190~1116	クムツク	KUMMUKH
B. C. 1116~ 900	アッシリア	ASSYRIA
B. C. 900~ 825	アラミー-ビザマニー	ARAMI-BIDZAMANI
B. C. 825~ 775	アッシリア	ASSYRIA
B. C. 775~ 736	ウラルトウ	URARTU
B. C. 736~ 653	アッシリア	ASSYRIA
B. C. 653~ 625	イスキット	ISKIT
B. C. 625~ 550	メド	MED
B. C. 550~ 331	ペルシア	PERSIA
B. C. 331~ 323	マケドニア	MACEDONIA
B. C. 323~ 145	セレウコス	SELEVKOS
B. C. 140~ 85	パルト	PART
B. C. 85~ 69	ビッグティグラ	BIGTIGRAN
B. C. 69~A. D. 53	ローマ	ROME
A. D. 53~ 59	パルト	PART
A. D. 59~ 161	ローマ	ROME
A. D. 161~ 226	パルト	PART
A. D. 226~ 297	ササン	SASAN
A. D. 297~ 359	ローマ	ROME
A. D. 359~ 363	ササン	SASAN
A. D. 363~ 395	ローマ	ROME
A. D. 395~ 639	ビザンティウム	BYZANTIUM
A. D. 639~ 661	モスLEM (アラブ)	MOSLEM (ARABS)
A. D. 661~1515	セルチュークその他	SELCHUKS
A. D. 1515~1924	オットマン	OTTOMAN

住みつくようになり まわりとの戦いや侵略をくり返し ながら次第に永続的な政権を樹立していったのである。

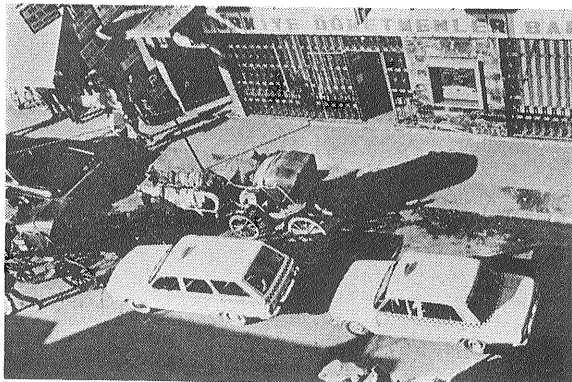
イスラム人の 侵 攻

ながい歴史の中でも特筆されるのは A. D. 639年の 攻防であろう。それは 5ヶ月にもわたる長期の激戦の後にイスラム教徒達のはじめてキリスト教国のビザンティンから この地を開放したことであろう。

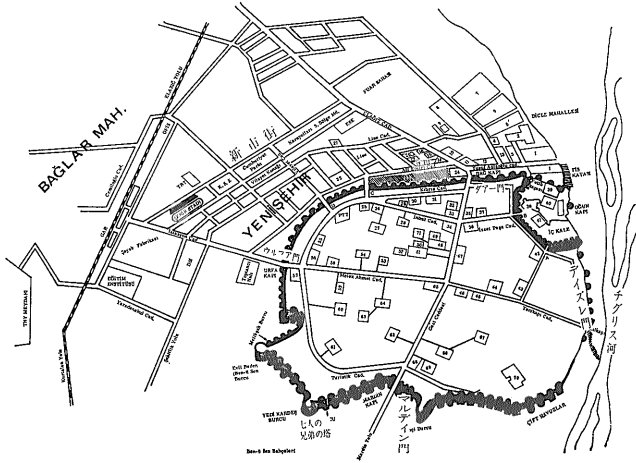
それはおよそ80名のイスラム教徒達の有志がチグリス河に通じる水路から市内に潜入し イスラム軍進入への突破口を開いたことから イスラム側の大勝利におわった。かくて ビザンティンの信仰の中心であったセント・トーマ寺院もこの時からイスラム寺院にぬりかえられ これを契機としてイスラム教は全アナトリアに拡がっていったのである。

ディヤルバクルの名称とその由来

ディヤルバクルの昔の名称は“アミッド”(Amid) とか“オミッド”(Omid) とか呼ばれていたことが アツシリア王の刀剣のつかに彫られた楔形文字から判明した。また この名は B. C. 3000年頃にこの地域を統治していたフルリー (Hurri) やアツシリアの碑文にもみ



③新旧のコントラスト (ディヤルバクル)
旧市内で客待をするタクシーとファイトン (二頭だての馬車)



第3図 籐(カレイ)タルボットのような形のディヤルバクルの城壁

られる。一方 ギリシアやラテン関係の資料では この市は“アミダ”(Amida)と呼ばれていた。市街や城壁はローマ時代に修復されたり拡張されている。

ローマ時代には“アウグスタ”(Augusta)と呼ばれていたが この名称もずっと昔に忘れ去られてしまっていた。7世紀の中頃にイスラム教徒達が この地に侵入してきて この地域全体を“ディヤルーベキール”(Diyar-Bekir)と呼んだ。これはアラブの種族の名前からつけられたものである。彼等がチグリスのこの地に住みついた時から この市の名前となった。

トルコ族によって支配されていた A. D. 1183—1232年の頃には この市は“カラアミッド”(Karaamid)と呼ばれた。“アミッド”または“カラアミッド”という名称は1869年まで使われ その後は1937年まで 全て公式には“ディヤルーベキール”と呼ばれてきた。

1937年10月15日にガジ ムスタファア ケマル(後のア

タチユルクで トルコ共和国の初代大統領)がこの地を訪問して正式にディヤルバクルと命名した。

世界第2の城壁

ディヤルバクルの市街は 城内の旧市街とこれから外に広がった新市街とに分かれている。勿論 今では外に向って市街は大きく発展しているけれども市の中心は城内にある。

旧市街をとりまわっている城壁は厚くて長い。82の城塔と 周囲5kmの城壁をもっており 中国の万里の長城に次いで その規模は世界で第2番目と称されている。

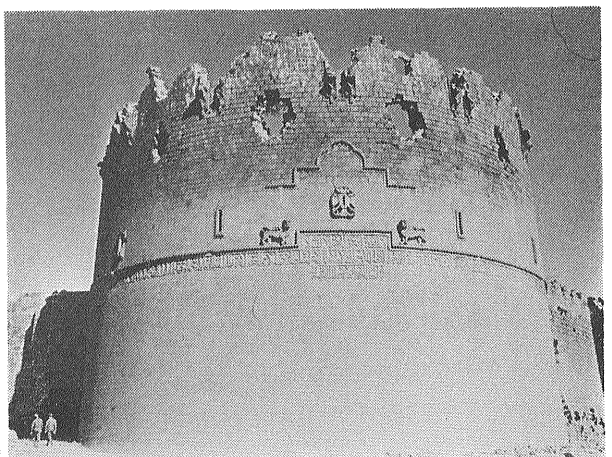
この城壁が何時 誰によってはじめて造られたかは明かでない。上空から見た城壁の型は“タルボット”(ヨーロッパ産のカレイ)のような形をしている。この城壁は それぞれの部族によって統治されている間に次々と修復されたり 拡張されたり また彫刻されたり シンボルが刻まれたりして今では歴史的に大変価値の高いものとなっている。アラミ(Aramis)によって造られた壁の部分には 神のシンボル 双頭の鷲 雄虎 太陽 星 馬 人およびさそりなどが彫られており トルコ族のシンボルである卍型の彫刻もみられる。

城壁は 4つの城門をそなえており それぞれの方角によりマルディン門 ウルファア門 ダア門およびディズレ門と呼ばれている。

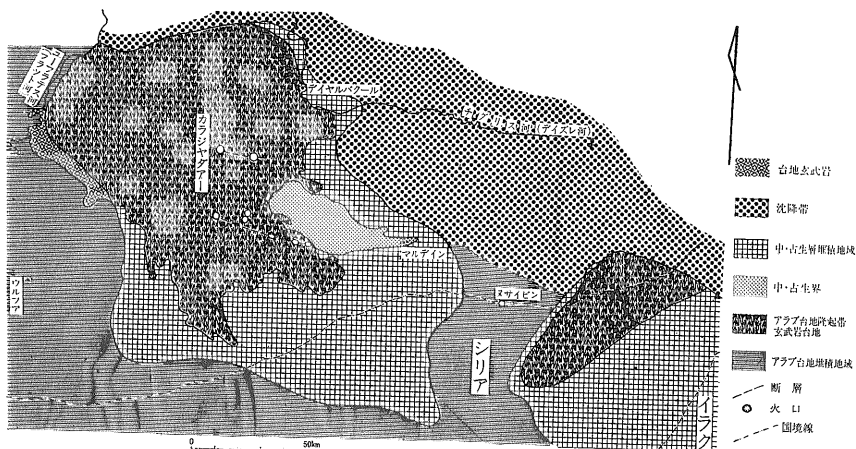
最も大規模な城壁の修復は A. D. 349年に当時のローマ皇帝コンスタンチヌス(Constantinus)によって おこなわれた。また A. D. 375年にはバレンティニヤヌス1世(Vallentinianus-I)により拡張工事がおこなわれ



④城壁にかこまれた旧市内の広場(ディヤルバクル) この地方の女性はすべてイスラム教徒で 黒衣に身をつつんでいる



⑤七人の兄弟の塔とよばれる城塔(ディヤルバクル) 双頭の鷲とライオンが彫られている 下の文字はアラビア文字 城塔は A. D. 1208年につくられた



第4図
ディヤルバクル付近
の地質構造区分図
MTA発行の地質図
ディヤルバクル
(1:500,000)より

ている。

玄武岩台地

トルコの南東部は陸続きでイラクやシリアと国境を接しており 地質構造のうえからは縁辺褶曲帯 (Border Folds) と呼ばれ その南はアラブ台地につづいている。アラブ台地では シリアの北部からトルコの南東部にかけて玄武岩が広い地域をカバーしている。

ディヤルバクルから南西方にかけて分布する玄武岩はトルコで第一級の規模をもっている。

この火山活動は アラブ台地と縁辺褶曲帯との間の “大きな構造的な断層” から発生したと考えられている。ほぼE-Wにのびる断層に沿って多数の噴出口が知られているが いわゆる “われ目噴出” ではない。それぞれが独立した火口をもつ一種の “中心噴出型” とみられている。南東縁辺褶曲帯のこの地域では 少なくとも

も100ヶ処以上もの火口から いっせいに噴出がはじまり 広い地域をカバーして巨大な玄武岩台地が形成されていった。

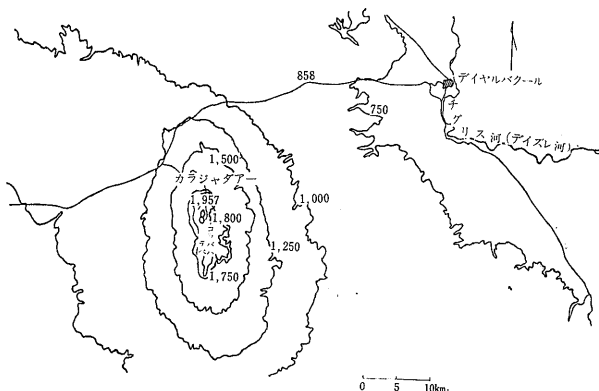
楯状火山 (Shield volcano)

昔は台地玄武岩といえば “われ目噴出” でできたものと考えられていたけれども 最近 溶岩台地の構造解析が進んだ結果 これらの中には 一種の中心噴出によってできた溶岩台地もあることが分かってきた。これは 幾つかの噴出の中心から噴出した溶岩が つながりあって広大な地域をカバーしたもので 云いかえると大きな楯状火山 (Shield volcano) の複合によってできたものである。

ディヤルバクル南西方の玄武岩台地も楯状火山の集合によってできたもので その総面積は7,200km²である。これはほぼ関東平野の平野部の面積に匹敵する。



⑥城壁にのこる古いレリーフ (ディヤルバクル)
真中の彫刻はライオン (上) が羊 (下) をとらえている図



第5図 ディヤルバクルとカラジャダア付近の地形略図

また 代表的な楯状火山として知られるハワイ島のマウナロア (Mauna Loa) 火山の総面積は約5,000km²である。

玄武岩台地の東縁はチグリス河の西岸で崖をつくっている。ディヤルバクルの市の裏手に廻ってみると高さ約60mのきりたった玄武岩の断崖がチグリス河に臨んでいる。この市は海拔が660mあって 付近一帯はなだらかな高原状の台地となっており 高い山々はみあたらない。はるか西方に小高い丘のような山がかすんでみえるが これがカラジャダアー (Karacadag) と呼ばれている山で この辺では最高峰である。

クルド族の居住地 (クルディスタン)

M. T. A. の白いジープはディヤルバクルを出発して茶褐色の玄武岩台地を一路南西に向って進む。この辺一帯はアナトリアの中でも最も暑い処で 10月も半ばというのに太陽の直射はきびしくて30°Cを突破した。真夏の7~8月は40°Cを超えて文字どおり灼熱の岩漠地帯となり 腰をおろしたら尻の下まで汗でぐっしょりするほどである。

市街地をはずれると早くも緑ひとつない岩のごろごろした台地に出る。この土地には トルコではキュルト (Kürd) と呼ばれる土着のクルド族が住んでいる。

太陽の直射を避けるために日干の煉瓦を積んだ低い構造の粗末な家屋が点在する。クルド族が住んでいる土地ということで 今でもクルディスタン (Kurdistan) という地名が残っている (第2図参照)

クルド族は 南はイランのケルマンシャー (Kermānshāh) から西はイラクとシリアの北部 トルコ南東部 北はアルメニアのエレバン (Erevan) 一帯に住む少数民族で 気性は荒く精悍で狩猟に長じている。定住または半遊牧で独自の言語をもっている。とくにシリアやイラクの国境に住むクルド族は自治を要求して しばしば反乱を起している。M. T. A. のキャンプの使用人も半数はクルド族であるが みな気の良い人達であった。ディヤルバクルの市の人口の半分以上はクルド族かま

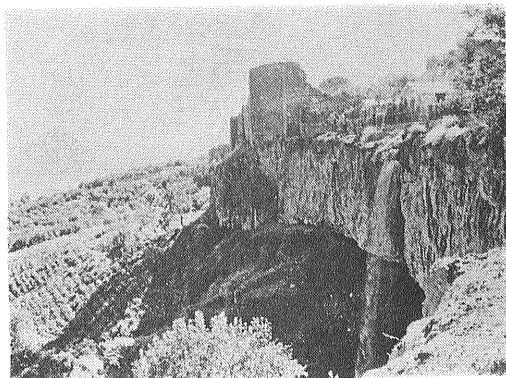
たは そのゆかりの人達であると云われている。

ディヤルバクルにはクルド族のたまり場があって そのこのチャイハネ (喫茶店) には いつもクルド族があつまって 彼等の社交の場となっている。

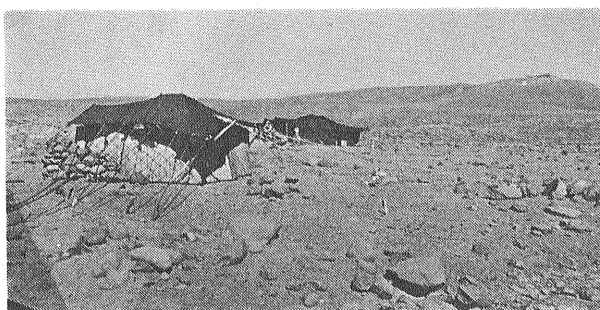
この台地に住むクルド族達は わずかに生えた緑の下草を利用して放牧する。家畜の多くは山羊と羊であるが らくだもこの地方には多く “ひと瘤らくだ” で使役用に使われている。

カラジャダアー (Karacadag)

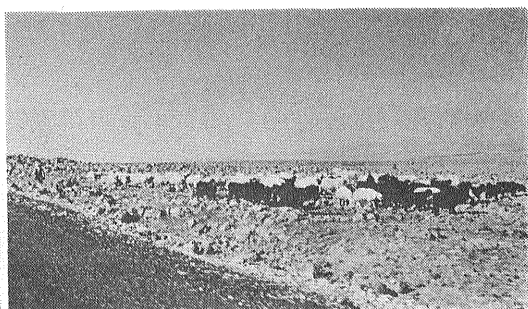
ディヤルバクルからは全く平坦な丘のようにみえた台地も 40kmも走ってくるといつしか海拔1,300mの丘の上に立っていた。楯状火山はヨーロッパで 中世の騎士達が使った楯に似ていることからこの名がおこったように まさに巨大な楯にそっくりである。粘性の少ない玄武岩溶岩の流出で 広い火山台地が形成されてゆくが フローユニット (Flow unit) 毎にその厚さが積算されてゆく。一般に1枚の溶岩の厚さは数m~10数mであるが なかには数10mから100mに達することもある。目的のカラジャダアーが見えてきたが 幾つも同じような小丘があって 何処が中心なのかよくわからない。一番高い丘はコラババテペ (Kollababa Tepe) と呼ばれ1,957mもある。テペ (Tepe) は 日本語の



⑦チグリス河に臨む玄武岩の崖 (ディヤルバクル) 崖の高さは約30mあり 最上部の溶岩のフローユニットは 厚さ約10mである



⑧玄武岩台地に点在するクルド族のテント (カラジャダアー)



⑨溶岩台地を移動する羊の群 (カラジャダアー) クルド族はわずかな緑の下草を求めて放牧する

“てっぺん”と同じ意味である。トルコ語の中でももっとも日本語に似て覚えやすい単語の1つである。カラジャダアーとはこの辺り一帯の総称であって特定のピークをさしたのではないことがわかった。

コラババテペの山頂にはトルコ軍の警備するパラボラアンテナがあり 軍事基地となっていたので敬遠して近づかぬことにした。

コラババテペは玄武岩溶岩のブロックからできているが そのすぐ下には 酸化して赤茶けた色の多孔質の溶岩の岩屑やスコリアが散乱している。この辺りが噴火の1つの中心となったらしいけれどもクレーターの跡はみられなかった。コラババテペのすぐ下の丘の標高は1,800mもありとても見晴がよい。まわりを眺めると下方にも幾つかのなだらかな小丘があり 丘と丘の間には浅い谷が刻まれており 火山体が少しづつ解析されているのがわかった。

この地方の玄武岩の噴出時代は洪積世 (Pleistocene) と考えられているが 一説には現世を主張する人もいるしかし 解析の状況からみてもとても現世とは考えられない。

アルカリ玄武岩 (Alkali basalt)

台地玄武岩には 噴出型式からみて われ目噴出と中心噴出の2つがあることはすでに述べてきたが 岩質的にも2つに大別される。その1つはデカン高原にみられるようなソレイト玄武岩 (Tholeiite basalt) でありもう1つはアルカリ玄武岩である。アルカリ玄武岩は海洋地域や大陸内部に産するが ソレイト玄武岩にくらべて量的には少ないといわれている。

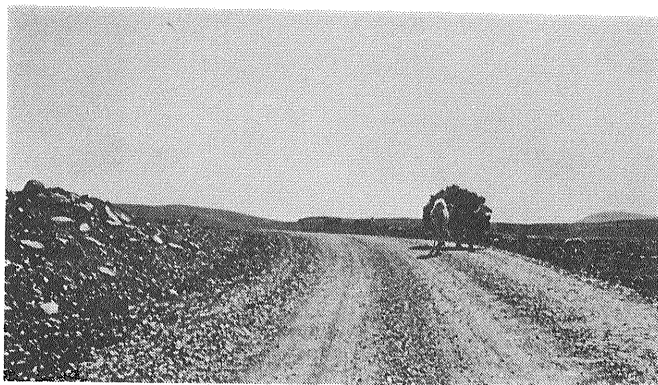
カラジャダアー一帯を広くおおう台地玄武岩は アルカリ玄武岩の1種である。

斑晶は おもにかんらん石で 単斜輝石 不透明鉄鉱物および斜長石などを伴っている。石基は一般にオフィテック組織で 斜長石 単斜輝石 かんらん石 不透明鉱物 (含チタン磁鉄鉱 イルメナイト) およびアルカリ長石などからなる。

このアルカリ玄武岩の記載はいずれ稿を改めて述べたい。

あとがき

溶岩流の全体の厚さは700m以上といわれている。



⑩らくだの行く溶岩台地(カラジャダアー)
らくだの背で荷物を運ぶクルド族



⑪溶岩台地に立つクルド族の少年(カラジャダアー)



⑫カラジャダアーの中心部に向うジープ
小高い丘はかつての噴出の中心の一つか



⑬カラジャダアーを構成する山々 ここは海拔1,800m以上で前方の
丘はかつての噴出の中心の一つらしい

これらの溶岩台地は 全く不毛の地であり ごろごろした玄武岩の岩塊と貧弱な灌木 刺の多い草が主役を占めている。 夏は灼熱の岩漠となり冬は寒気のきびしいこの地に 羊や山羊の群れを追ってしんぼう強く生きてゆこうとするクルド族のたくましい生活力には メカニズムにふりまわされている現代人に1つの教訓を与えているように思えてならない。 しかし デイヤルパクルの北では 大資本のシエル石油の手により 溶岩台地の上から下の第三紀層を狙って 石油開発のボーリングがはじめられており 近い将来には その様相は一変するかも知れない。



④溶岩のブロックからなる小丘(カラジヤター)

文 献

岸本通夫 (1968) : 古代オリエント—世界の歴史—2, 河出書房新書

M. T. A. (1962): Geological Map of Diyarbakır (Scale 1 : 500,000) and its explanatory text.

TEKİN, A. (1971): Diyarbakır. Diyarbakır Tanıtma ve Turizm Derneği Yayınları—No. 22.

新刊紹介

VOLCANOES AND TECTONOSPHERE

「火山と構造圏」と題するこの本は 東海大学早川正巳教授の還暦記念として出版されたもので 27篇の英文論文が載せられている。 早川教授の国際的な活動を反映し 寄稿者は日・英・伊・印・米・ソ連・台湾に及んでいる。 この本は三部から構成される

第1部は火山・岩石に関する論文がおもに集められている。 太平洋の海山 インド洋や大西洋の海底地形と火山活動 カムチャッカ火山のマグマ溜り Socorro 島の玄武岩などソ連とそのほかの研究が載せられている。 また 日本列島の地史の海底火山活動(湊) 地球の進化史のうえでの玄武岩マグマ(牛来) 火山岩中の Ni 挙動(都城・紫藤) 火山から生産されるマグマの量(横山) など日本の論文が寄せられている。

第2部は 地質構造の要因をつくる地殻(構造圏)を対象とした地球物理関係の論文から構成されている。 海洋底地殻の地震学的モデル (KOSMINSKAYA ほか) 地震波速度の時間的変化(早川・飯塚) 地震発生前の速度変化とダイラタンシイ仮説(Nur) 東北日本島弧—海溝系の地震活動と構造(南雲) 空中磁探による北海道地磁気異常と地質学的解釈(小川・陶山) などがおもなものである。

第3部は1・2部以外の各分野の論文からなり そのなかには アーツ衛星映像解析によるイタリアの主要構造と温泉・火山・地震との関連性(Barrier and Fanell) 北西太平洋の深部裂かた地殻形成(Sychev) などがある。

これらの論文題目にみられるように 地球物理学 地質学 火山学 海洋地質学など 多分野にわたる研究が載せられている。 世界の三大洋の海山 海底地形 火山活動についてのソ連研究者たちの論文は それらの概観または全体像を紹介したものである。 また マントルダイアピリズムにより島弧—海溝系の地震活動とテクトニクスを説明しようとする南雲の論文や 地磁気異常で北海道の地体構造を浮彫りにした小川(克)・陶山の論文などは地質学にとっても重要な研究である。 地震波速度の時間的変化についての早川・飯塚の研究や地震前兆としての速度変化をダイラタンシイと関連させる Nur の研究は地震予知の基礎的研究となるものであろう。 そのほか 英仏間大陸棚やオホーツクおよび日本海の深海盆などについての研究論文があり 地質学・海洋地質学などの研究者にとっても見過すことのできないものが多い。

地球科学諸分野の総合化をねらいとして 英文で書かれ 日本で出版された書物は おそらくこの本が初めてと考えられる。 内容も国際的な水準といってよからう。 みかえしに印刷された 早川さんの手による火山と構造圏の状態モデルのスケッチは含蓄深く また楽しいものである。 なお著者割引の便宜がある(2割引 6,400円)。

Editors: Hitoshi AOKI and Susumu IZUKA

東海大学出版会 1976. B 5版 370p. 定価8,000円(送料別)

申込先

〒167 東京都新宿区新宿3-27-4 新宿東海ビル
東海大学出版会 気付
飯塚進または青木斌

☎ 03-356-1541~3 振替東京46614